

退去せしめ、悉く火除地と成る。文政二年以前は、廣大なる空地にて原野の如く草生ひ茂り、蜘蛛に往來の細道あるのみなりしが、或時一婦人邂逅此の細道を通りけるに、草原より蛇出で追ひ懸けたり。婦人恐れ逃げ、るに、蛇彌追ひかけ、る。折節士一人通り合はせ、此の體を見て、是は蛇に見込まれたるなるべしと思ひ、婦人に謂つて曰く、我指添ひ居れば恐るべき事なし。元の所へ立戻れといへり。婦人甚だ恐怖すといへども、士人の詞に隨ひ連立ちて立戻りけるに、蛇も草原を立戻り、元の所に至り、往來の傍なる穴へ入りたりけり。此に於て士人脇差に指添へある小刀を取出し、双の方を穴の奥へ向けてさし、扱婦人に謂つて逃げ去らしたるに、蛇また追ひ掛んとするに、彼の小刀の爲に、二筋に裂かれ死したりと云ふ古傳説ありと。此の外にも、そのかみ蛇の爲に、往來の者難儀せし咄共、亡友湯淺祇庸いへり。然れば此の地邊は、むかしより蛇の怪異奇談折々ありて、往來人の妨害をなしたりしと聞ゆ。

## ○神明舊社地

延寶二年の野町神明由來書に云ふ。當社神明御鎮座之始

者、唯今摩利支天山と申處に御宮有之。然處唯今本多安房殿居屋敷に不相成以前者、小山に而林有之故、摩利支天山より彼地の勸請仕候と見え、國事昌披問答にも、本多安房守屋敷は、高山南坊の舊第也。下の方隣屋敷は神明社之舊地成由とあり。按ずるに、右舊社地といひ傳へたる地は、今いふ廣坂の高にて、此の地昔は小高き岡山なりしと聞ゆ。愛宕明王院由來書に、舊地は今本多安房守居屋敷の地なるよし記載すれば、昔は此の地に神明と愛宕と兩社並びありたるなるべし。但し卯辰觀音院に傳來せし古文書に、文祿五年に犀川神明社造立の時、小坂庄山、上の神明神主と争論に相成り、山、上の神明は犀川神明へ合併を命ぜられたるよし見られたれば、小立野廣坂高にありし神明は、別社にて早く廢社とは成りたるならんか。摩利支天山にありし神明のよし、彼の由來に書きたるは過聞なるべし。

## ○金澤神明社傳話

聞見雜錄に云ふ。加州松任の城主蕪木右衛門大夫と云ふ者熨斗付の刀失せし時、人々打入起請せしに、武者修行の篠野藏人と云ふ者無心元よしなり。藏人之を聞きて是非な

き仕合哉、此事いへる人々を果さば、却つて盜人に極れり。所詮鐵火を取らんと所々に札を立て、金澤の神明に於て異儀なく鐵火を取りたり。侍なればなひたる事もなければども、可任法とて繩をなひ、扱手水を遣ひ、見物の諸人に見せ、其の後云ふやうは、侍たる者のかやうの不實を蒙るは、冥加に盡きたる驗なり、切腹せんとて、兼ねて井上勘左衛門といふ者に介錯を頼み置きて、其場に於て切腹すと。平次按ずるに、鎬木右衛門大夫は、鎬木右衛門頼信の父にて、右衛門大夫入道常專と云ひ、松任本誓寺宗誓の掣と成り、松任に築城して賊將と成る。此の子右衛門頼信は、天正五年上杉謙信の爲に城陥り死すと、三州志にいへり。然れば右篠野が事件は、永祿元龜頃の事ならんか。其の頃金澤の神明と呼べるは、小立野の神明社なるべし。往古金澤と稱する地は、此の地邊のみなる事、下文金洗澤の條下に載せたる趣にて知るべし。

## ○愛宕舊社地

卯辰愛宕明王院延寶二年由來書に云ふ。當寺愛宕は、利家卿以來御祈禱所に而、金澤愛宕寺明王院と號し、本多安房

居屋敷の地に有之處、利家卿越中より金澤御入城の後、御城鬼門先へ愛宕堂建立可致旨被仰出、慶長六年卯辰山へ移轉仕。とあり。三靈記に、此の愛宕社は、昔佐久間玄蕃在城の頃よりの社にて、利長卿甚だ信仰し給ふとあり。されば佐久間盛政尾山在城の頃、此の地に勸請せし社敷、若しくは其の以前より此の地に鎮座せし社なるにより、別當所も金澤山愛宕寺とは呼べるならんか。慶長十一年八月の石浦七ヶ村氏子連名訴狀に、かのえたつの年三月九日に、國中一亂引申。其時御觀音様山中へのけ申候へば、敵御堂を燒はらひ申。其後氏子共山中より下し、居屋にすゑ置申候處、三年過てみづのえうまの年、ふどう坊石浦村へ御出候て、三月廿八日に御觀音様御かり被成、其後出羽殿町に御座候。此近年かのとうしの年、河北郡の内うたつ山へ御觀音様御引被成候由、七村の氏子共承及驚入。とあり。右觀音は、石浦山王の本地佛にて、天正八年庚辰三月社殿兵火に罹り、同十年壬午三月不動坊と云ふ坊主、本地佛を借り行き、後出羽殿町に置きたるをば、慶長六年辛丑卯辰山へ移したりとなり。右出羽殿町に置きたるといへるは、小立